

E-3 富山県における農家(その2) — 黒部川扇状地における散村住居 —
富山大教育 新福 祐子

1. 研究目的 前報の砺波散村について、今回はそれと比較するため黒部川扇状地に点在する入善散村について調査を行なった。この地域は特に自然環境に恵まれずその上加賀藩のひざ許の砺波よりむしろ社会的制約もきびしく、農民の生活は相当圧迫されていたものと考えられる。その中でどのように散村住居が形成されてきたか、その住まいの変化の中から農村の生活の過程を追求することが目的である。

2. 調査方法 富山県入善町新屋80戸、上野43戸について戸別訪問による調査を行なった。調査事項は住居規模、配置、間取りとその変化、部屋の使い方、住まい方などである。

3. まとめ 1)散村形態の特徴はこんもりした屋敷林に囲まれて家屋が点在する風景であるが、この地区の屋敷林は自然のままの森林が利用されたものであった。その上黒部川が荒れ川であったため扇状地の開拓がはばまれ、農民の貧困さは分家用建築資材に屋敷林を利用せざるを得なかった。また分家の分布も本家を中心にその周辺で行われ、同姓がかたまつて坪を形成し、散村形態は分家によつてくずされていった。2)間取りの発達も家を改造する際、客用の部屋より家族の生活空間をひろげるということに重点がおかれた。これもひとつは、この地区の仏壇の位置がへや・なんどなどの拡張を可能ならしめたと考えられる。3)居室の使い方は、当初の用途別という固定観念をくずし、生活への適応性のため流動的に多様化してきた。そして伝統的住意識の執念の弱さが、この地区の家の歴史の浅さを示していた。